

高齢者の生きがい推進政策についての批判的検討

藤井 暢弥

1. 先行研究の整理

生きがいを対象とした実証研究は、社会老年学の理論枠組みである離脱理論や活動理論などを拠り所として、仮説の検証が行われている。また、これまでの研究成果から社会参加活動（社会的役割）が、高齢者の生きがいに影響を及ぼすことがわかっている。

2. 本研究の課題

日本の生きがい政策の目標は、「健康な高齢者の生きがい（社会参加活動）を通しての生きがい支援」である。

生きがいをもたらす社会的支援という視点から、高齢者に対する個々の具体的な支援内容をみると、健康な高齢者→社会参加、要介護・要支援の高齢者→自立支援、介護が必要な高齢者→介護の質の向上・QOL、疾患を持った高齢者→治癒・QOLが行われている。

しかし、生きがい政策の問題点は二つある。第一に、対象者によって異なる支援活動が行われていることは社会的支援における公平と公正という理念的な立場からみて疑義がある。第二に豊かな社会生活から平均寿命の延長、介護技術の発達による長期に及ぶ介護期間、医療技術の発達によって慢性疾患を抱えながら日常生活を送る高齢者の増加といった高齢者を取り巻く社会状況の変化からみて、近年健康ではない高齢者の生きがいを考慮することへの必要性は増している。

一つの解決策として、目標を「高齢者の生きがいを通しての生きがい支援」とすることである。このことで高齢者に柔軟に対応した生きがい支援が可能になるだろう。

今日、高齢者に対して医療・福祉・保障の総合的な提供・支援の必要性が言われている。これら一連の社会的な提供・支援に、生きがいをキーワードにした包括的な捉え方を反映させることは、今後の課題になるだろう。

3. 統計的手法による実証的研究

3.1 調査目的・調査方法

高齢者の生きがい感（モラール）に影響を与える属性の確認、社会参加活動の種類によってモラールに与える影響力の違い、モラールが健康状態にもたらす影響、生きがい感の規定要因の性別による違いを検証するために60歳以上の男女を対象に無作為抽出による質問調査を行った（自計式郵送法）。また、有効回収数776（64.5%）であった。

3.2 分析方法

高齢者の主観的生きがい感を測定する尺度としてPGCモラール尺度を使った。また、属性によって生きがい感に与える影響の違いを明らかにするために平均値の差の検定や分散分析を行った。また、社会参加活動とモラールの因果関係や属性間の相互関係などを明らかにするために重回帰分析をおこなった。

3.3 分析結果

① 生きがい感を向上させる各属性は、男女差が見られたものの、年齢、職業、学歴、健康状態、健康状態の変化、外出頻度、経済状態であった。

② 社会参加活動の種類によってモラールに対する影響力に違いがみられた。

③ ②に他の属性を投入しても、ある種の社会参加活動がモラールに影響を与えていた。また、モデルの当てはまり具合に男女差がみられた。

④ 被説明変数を健康状態にしてモラールを他の属性と共に投入した結果、モラールが健康状態に有意な影響を与えていた。

4 まとめ

社会参加を通しての生きがい支援をする際は、モラール向上に効果があるものもないものがある。また、性別によって社会参加活動がモラールに与える影響力の違いに考慮する必要がある。